

## 遷宮と「夜明け前」

### 樋口 帯刀

8年後に伊勢神宮が遷宮される。その内容は建築物の立替と、調度品の造り替えである。

建築物の用材は、全て桧である。これをご神木と尊称している。古は神坂地区からも切り出していたらしい。御嶽山麓の東面が連綿とし、前回は付知地区からも、この度は加子母地区からも切り出される。

今年（平成17年）6月初旬、立ち木に斧を入れる御杣始祭（みそまはじめさい）が現地で執行される。宮川を綱で曳行する、御木曳（おきびき）までの、輸送の通過点の各地では、奉祝行事が催される。

この用材で数多くの建築物が造営される。その中で、最も恐れ多いのは正殿である。この正殿の構造柱の一つに、棟持柱（むねもちばしら）という柱が2本ある。この構造例を、国内では二例と見ることはできない。

昭和50年代、一冊の雑誌の表紙に、ハッと釘付けられることになる（49ページ Fig1、Fig2）。高床式の民家に不釣合いの、大きく反った切妻が張り出し、これを一本の柱で、支えているのではないか。どうみても、日本の民家ではない。これ正に正殿の棟持柱とイコールである。

正殿の棟持柱は、力学的には不要である。形式的に踏襲しているのであるが、ここに重要な意味があるのである。

さて、もろもろの文献は、曾我氏専権時代までは、天皇制と政権体制が、中国

大陸に根拠地をおく北方騎馬民族に、ニアイコールと読ませてもらえる。これはかつて、日本人の一部が騎馬民族の移入を暗示している。

一方、不要の棟持柱を連綿と伝える格式は、日本人の一部が、南方からの移入をも暗示している。

ここで神話を取り上げなければならなくなる。

北方南方どちらが多勢かはさておき、この渡来民が先住民族を征服することになる。古事記と日本書紀は、これを天孫降臨とし、被征服者は出雲の神である。またを天神（あまつかみ）地祇（くにつかみ）といている。

出雲大社の建築様式が、先住民族の建築様式を踏襲しているのは確かだろう。ただし、千木だけは後世の付加物であると考えられる。

インドの文献によれば、かの宗教に

- 1 浄、不浄
- 2 上位、下位
- 3 神は山から下りてきて、山へ帰る
- 4 お供え物を頂いて帰り、これを食べたり、お裾分けしたりする
- 5 祭りが終われば、祭場をこわす
- 6 祖先を祭る

の思想を持っているのがある。これ日本の神道の思想である。

古代においては、建築様式的には、複

数の渡来民の正殿様式と、先住民の出雲様式の二つがあったと考えられる。これらの結論には、考古学の出土品も、参考にしなければならないと意識している。いずれも高床式である。

時代が下って先進文化の仏教が渡来。以来、明治までの千年間神仏混合、佛主神従となった。伊勢神宮と出雲大社の、二社以外の、神社の建築様式は、寺院建築の様式が取り入れられている。主となるのが、流破風と唐破風であろう。

さて、ご神木が、木曾谷から切り出されるのは、近隣の住民として誇りに思う。だがここは国有林である。

徳川家康は、関が原合戦に勝利して、木曾川流域を尾張領に組み入れる。目の

前の森林資源が、ままならない木曾谷民衆の、苦難がここから始まる。明治になって、資源開放の世が明けると期待を持ったが、以前より増して、厳しい沙汰であった。

この高まる期待と、反する絶望を、小説「夜明け前」によく描写されている。まだある。続けざまに、電力王桃介が木曾川の水を、一気に飲み下してしまうのである。

— ご神木が切り出される — この響き、私には、日本人はどこから来た？ 目の前の物は他人のもの？ — 主権 — 改めて考えさせられるのである。

(中津川市落合)